

まあ、よんでみて！

発行：(公社)大阪府理学療法士会 障害者保健福祉部
〒540-0028 大阪市中央区常盤町1-4-12-301 TEL 06-6942-7233
E-mail: disabled@physiotherapist-osk.or.jp
印刷所：身体障がい者支援施設 大阪ワークセンター
〒594-0031 和泉市伏屋町5-10-11 TEL 0725-57-0883

第27号

発行日 2016年 12月

今号の特集は、障がい者スポーツの競技団体が抱える課題と今後の展望について、アンプティサッカー日本代表監督の杉野氏にお話を伺っております。

大阪車いすテニス協会会長の大前氏には、大阪オープンの歩みについて、また、全国パーキンソン病友の会大阪府支部長の松本氏に、理学療法士に対するメッセージをいただきました。

目次:

アンプティサッカーの課題と展望	1
車いすテニス大阪オープンの歩み	2
選手インタビュー	3
活動報告	8
理学療法士に望むもの	11

日本のアンプティサッカー競技における課題と展望

杉野 正幸 氏

アンプティサッカー日本代表監督

特定非営利活動法人 日本アンプティサッカー協会副理事長

中米コスタリカ生まれ、大阪府枚方市出身。都内外資系金融機関勤務。



Q. アンプティサッカーに関わるようになったきっかけは？

前職での上司がJリーグクラブで監督を務め、退任を機に東京で知的障がいの子供たちを集めサッカースクールを開校。そのスクール運営を引き継いだのが障がい者サッカーに携わるきっかけでした。その後、転職した現在の職場で9年前に初めての障がい者雇用をする際、国内に該当者がおらずブラジルから呼び寄せ来日したのが当時18歳の現役アンプティサッカーブラジル代表選手のヒッキでした。当時はアンプティサッカーが日本になく、知的障がい者のサッカースクールにヒッキを受け入れたのが日本でのアンプティサッカーの始まりでした。

Q. アンプティサッカーの魅力について教えてください

アンプティサッカーは、下肢切断障がいを持つものにとって、義足を外し立位で出来る数少ない障がい者スポーツです。

まあ、よんでみて！

フィールドプレーヤーはロフトストランドクラッチを使い自力で走り脚一本でプレーし、ゴールキーパーは片手でゴールを守る。無いものを嘆くのではなく今ある機能を最大限に発揮するサッカーです。

高価な器具を必要としないことから該当者にとって、比較的容易に始められることや性別や年齢に関係なくプレーが出来ることもアンプティサッカーの大きな魅力の一つと言えます。

ある選手はこのスポーツに出会い人生が180度変わったと言い、ある選手は下を向いていた人生を今は上を向いて生きていたと言葉にしました。試合で負けて悔しいと泣き、勝って嬉しいと泣く彼らの言葉はアンプティサッカーが「リハビリスポーツ」ではなく一つの「競技」であることを証明していると信じています。

Q. 競技をサポートする側としての今後の課題はどのような事が挙げられますか？

人材不足：国内大会運営や海外への代表チーム派遣に伴う一連の多大な業務を数少ないボランティアスタッフが一人何役もこなさなければならず、所々で手薄になってしまうこと。

資金不足：非パラリンピック競技である為に公的な支援を受けられず、協賛企業や大会毎にスポット協賛獲得活動をこなさなければならず、毎回自転車操業になってしまうこと。

これらを解消する為、今年4月に発足した日本障がい者サッカー連盟と協調し、国内大会を盛り上げ、日本代表チームを世界大会で活躍させることが必須と考えます。

強化・普及・周知活動を活発化させ、認知度の向上と選手人数の確保が課題と考えます。

Q. アンプティサッカーの今後の展望について教えてください

今後の展望は、国内2大大会であるレオピン杯、日本選手権の会場を観客で満員にし、一人でも多くのアンプティサッカーの理解者とファンを増やすことや、積極的に新しい試みや大会を新設することです。

そして、2年に1度の世界大会で次回の2018年大会(開催地未定)で前回大会以上の結果を残すことです。

世界アンプティサッカー連盟加盟各国と協調しパラリンピックの競技化になるよう最善を尽くすことならびにいつか世界大会を誘致し日本で開催し、日本代表としてメダルを獲得することを最大の目標として活動しています。

大阪国際車いすテニストーナメント（大阪オープン）の歩み

大前 千代子 氏

大阪車いすテニス協会会長

毎年9月に韮テニスセンターにて大阪オープンを開催しています。大阪オープンと名を変えて今年第16回を迎え、無事に終了しました。

大阪オープンの前身である「近畿選手権」は、1989年北大阪テニス協会様のご協力のもと寝屋川市で開催されました。後に国内・海外の選手に国際大会参加の機会を与えるため、1994年「関西オープン」という名称に改め開催されました。

2001年には「大阪国際車いすテニストーナメント(大阪オープン)」に改称され、舞洲から韮ヶ丘テニスセンターに会場を移す事が可能になり現在に至っています。

1982年に大阪に車いすテニスを紹介され、これまでにない面白いスポーツの登場に、車いすテニスファンは瞬く間に増えていきました。しかし、現実には厳しくコートが傷む・タイヤの跡が付いたら困るなどの理由から、車いすが使わせてもらえるコートもなく、指導してくれる人もいない状況でした。車いすテニスをプレーするには、自分たちで環境を整えていかなければなりません。そんな中、ありがたいことに泉ヶ丘テニスクラブと芦屋グリーンテニスクラブのそれぞれのオーナーさんのご理解で、月に2回コートを夜に無料開放してくださいましたが、それだけでは物足りず、有志であちらこちらのコートに交渉へ行ったものです。介護を連れて来いだの、車いすでテニスなんか出来るわけがないだの随分理不尽なことも言われてきましたが、情熱というものは凄い・・・そんなことにはへこたれません。

ほぼ日常用車いすに近い車いすを、自分たちで工夫しながらの練習を繰り返し、これが段々上達してくると、成果を試したい。しかし、日常用に近い車いすではコートのカバーリングなんか一人で出来るわけありませんでした。そこで健常者と車いすのダブルスであるニューミックス(またの名をアップダウン)を盛んに開催してきました。やがて車いすも改良に改良が重ねられて、動きも自立できるようになり、シングルスが可能になると、勝手なもので、だんだんとニューミックスの大会が廃れるという現象が起きてきました。現在、ニューミックスを行っているのは、大阪では大阪市長杯と枚方市長杯の2つの大会しか残っていません。

簡単ではありますが、大阪の車いすテニスの歴史を紹介させていただきました。車いすテニスが大阪に紹介されて34年。当時では考えられないくらい立派なものに成長しました。もはやフィジオサポートがトーナメントには欠かせないもので、選手もそれが当たり前を受けられる、私たちの選手時代から考えると、選手は感謝の念をもたないと罰が当たります。5年前から大阪府理学療法士会の皆様にお世話になっていますが、選手が試合に行って一番必要とするのが、疲れた体のメンテナンスです。毎年来る選手たちの評判はとても好評です。これから先、大会が続く限り是非大阪府理学療法士会様のご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

陸上競技(200m走・1500m走) 選手インタビュー

竹村 明結美 選手 (2016年 大阪府障がい者スポーツ大会 出場)

記者:この競技をいつからされていますか？

選手:中2の終わりからやっています(現在は高3)。

記者:この競技をやると思ったきっかけは何ですか？

選手:クラブ自体のことを友達から聞き、それからです。

記者:友達から聞いて？

選手:はい。

記者:すぐにやろうと思いましたか？

選手:いいえ。クラブに入る前に学校の周りを走るトレーニングをしました。そして、中2の4月からずっとやっています。

まあ、よんでみて！

記者: こういう競技をやり始めて生活面や体の調子で良くなったとか、変わったということはあるですか？

選手: 生活面ではとくにありませんが、競技に出場したらどんどん記録が上がって、楽しかった。

記者: 体の調子が競技する前に比べて良くなったということはあるですか？

選手: 良くなったこともあるし、今日は、良くなかったなっていうこともあります。

記者: 最近の競技成績は良いほうですか？

選手: 以前は800mと1500mをやっていました。今は種目を変えて400m、200m、100mをやっています。今日は200mと1500mを走りました。1500mを走って記録が上がったかどうかちょっと分からないです。

記者: 今日はすごい上位だったようですね。

選手: それほどでもないです。前の速い選手に2周ぐらい付いて行って、それでちょっと上がったという感じですよ。

記者: やはりそういう人がいると、走りやすいものですか？

選手: はい。

記者: なるほど。ところで、この大会以外に出ていますか？

選手: 陸上以外には、サッカー、バトミントン、そして卓球に出ています。

記者: それらの成績は如何ですか？

選手: 去年卓球に出場したのですが、優勝はできませんでした。それでも女子の中で3位に入りました。

記者: おお、すごいですね。普段どれくらい練習しているのですか？様々な競技をされているようですが。

選手: 学校での練習が月、火、木曜で、それとは別に水、金曜に練習があります。ですから、ほぼ1週間練習をしています。それらは夜間の練習ですけど、日曜日にみんなが集まって練習したり、日曜日に大会があるときには土曜日にしています。

記者: 今回こういう競技の前・後のコンディショニングは、大会に行ったら受けていますか？

選手: 大会が始まる前にはアップや流しをみんなで行います。それ以外に、競技に合わせて自分でトレーニングするようにしています。

記者: 普段は自分でしているということですね？

選手: はい。普段は自分でやっています。

記者: 今回コンディショニングルームを利用しようと思われたきっかけはなんですか。チラシを見て、「あ、あるんやな」という感じですか。

選手: そうです。自分でストレッチとかをしているのですが、自分ではよく伸ばせなくて。

記者: セルフストレッチが十分にできないと感じるということですか？

選手: そうです。それで、大会ではたまにこうやってストレッチをしてくれる場所がある。

記者: そうなのは経験されているのですね、他のところで。

選手: はい、しています。

記者: スポーツ大会でこういうコンディショニングを受けられるのは、今回が初めてですか？

選手: いや。中2のときから3~4回ぐらいはお世話になっています。

記者: 3~4回でしたら、ちょうど私が3年ほど前からコンディショニングルームに関わっているんで、多分初回から来ていただいているかもしれないですね。こういうのを受けて、何か変わることはありませんか。

選手: やっぱり走る前にストレッチなどをしてくださったら、体が軽くなって走りやすいです。

記者: 走りやすいですか。

選手: はい。走りやすいです。そして、走り終わったときには、動きが遅くなり、すぐには動けなくなるので、こういうのを利用します。

記者: 試しに受けみたら、受けたほうがいいなと思ったということですね。

選手: そうです。

記者: コンディショニングに対して、こういうのも付け加えてほしいという要望はありますか？

選手: 要望？例えばどんなのですか？

記者: そうですね。メンタル面のアドバイスもしてほしいとか、冷やしてもらえると良いというような意見がたまにあります。何かありますか？無理にとは申しませんが。

選手: いや、今のところはありません。

記者: 今後のスポーツにおけるご自身の目標は何ですか？

選手: 最初は目標がなかったのですが、続けているうちに、どんどん目標が出てきて、記録もどんどん上がっています。今は、頑張ってパラに行きたいなと思っています。

記者: 分かりました。このようなスポーツを通じて何か良いことがあるとすれば、他の人に何かメッセージはありますか？

選手: 陸上でですか？

記者: いえ、身体になんらかの障がいがあって、そのためにちょっと積極的になれない人が、こういうスポーツを通じて何か得られるものがあれば。

選手: 難しいな。難しい。でも、どんどん積極的にスポーツとかをやっていけば、何か障がいを持っていても、なんらかの楽しみがあるかなって思います。

記者: 分かりました。どうもお時間ありがとうございました。

フライングディスク 選手インタビュー

山村 結 選手 (2016年 大阪府障がい者スポーツ大会 出場)

記者: では、よろしくお願ひします。

選手: よろしくお願ひします。

記者: 本日フライングディスク競技の帯同をさせていただきましたが、山村さんはフライングディスクをしてどれぐらいになりますか？

選手: 8年です。

記者: 8年ですか。結構長いですね。っていうことは10代、高校生の時から始めたのですか？

選手: 高校3年生からです。

記者: 始めるきっかけとかあったのですか？

選手: きっかけは、たまたまここファインプラザに来たときに、練習会やってるんでどうですかっていうことで…。

まあ、よんでみて！

記者:それまでは、他のスポーツをしていたりとかありましたか？

選手:ずっと水泳をやっていました。

記者:そうなんですね。それはいつごろからですか？

選手:水泳はもうちっちゃいころからで2歳、3歳からです。

記者:そうなんですね。それでたまたまファインプラザでフライングディスクの練習に来ない？ という声掛けがあったのですね。始めどうでした？結果は付いてきましたか？

選手:全然駄目で。

記者:結果として出始めたのは、どれぐらい経過してきてからですか？

選手:練習会に来てから半年ぐらいで。

記者:そこからどんどん成績が上がってきて、いろんな大会に出るようになったのですか？

選手:はい。

記者:日本の中で大きな大会っていうのは？いろんな大会に出られたというのはどのような大会でしょうか？

選手:フライングディスク自体大きい大会っていうのが、全国障害者スポーツ大会(国体)っていうものだけなんです。

記者:その大会に出場して成績的にはどんな感じでしたか？

選手:一応、国体記録を出しました。

記者:えっ、そうなんですね。凄いです。

選手:はい。

記者:その記録は現在も？

選手:現在も塗り替えられてないです。

記者:では、記録保持者ですね。

選手:はい。

記者:記録を保持しているということで、その成績を伸ばしていこうと。もっと上げたいなっていう目標はどうですか？

選手:目標ありますね。

記者:目標を達成するためや記録を更新するために普段練習はどのぐらいの頻度でされていますか？

選手:今、週末月3回の練習会と、ちょっと家の前の河川敷に大きい広場があるのでちょっと投げたり。もう普段はどっちかっていうと筋力強化のほうで水泳をしたり、トレーニング室でトレーニングしたりっていうのを、必ず週末はしています。

記者:週末に筋力トレーニング、それ以外は練習をしているのですか？

選手:はい。

記者:そのときにはコーチとか誰かがいるような環境で行っているのですか？

選手:そうです。



山村 結 選手

記者: 訪問のリハビリも受けていらっしゃるとのことですが？

選手: 訪問リハビリでトレーニングしてます。

記者: 毎日ですか？

選手: 週4日です。1回1時間半ぐらいしてます。

記者: リハビリ中に身体的なところで気なることはありますか？

選手: 身体を動かすっていうのはやっぱり基本大事に思っているんですけど、なかなか自分の病気に付随するそういうなんていうのかな、意思ではどうにもできないところについてのコントロールというのがなかなか難しくて。そういうのはやっぱり専門的なリハビリの先生とかに、自分の体の特性としたスポーツとのマッチングっていうのをお願いしないと、なかなか自分では難しいなっていうのが日々感じてるところです。

記者: そういう意味では週4回のリハビリや、週末の実際の練習とか、他のスポーツもしたりというようなところで、体の調子が整えられてる感じということですよ。

選手: はい。

記者: 大会の時の、このようなコンディショニングルームに関しては、選手側から見た場合にどういうふうな思いがあるかっていうか、どういう目的でこの場を利用したいなっていう思いがあるのか。あってよかったとか、あっても別にどっちでもいいみたいな意見があれば教えてもらいたと思いますがいかがでしょうか？

選手: もちろんあるに越したことはないというか、全国大会に行った時っってもうずっと常設されているので、試合前、試合後っていうのは必ず行かせてもらっているのであったらすごくありがたいです。けど、府の大会に関してその周知があまりないという状況で、知ってる人は知ってるけどっていうところはあるんです。

記者: 今回受けてみた感想って何かありますか？

選手: やっぱり自分では動かせないところっていうのは他力本願というのか、他の方をお願いしないといけないので。でもファインプラザとかは健康運動指導士の先生や障がい者スポーツの指導員が多いんですけど、そういう体の観点を診てくださる先生っていうのはほとんどいないので、やっぱり専門的な方がいらっしゃるのには心強いです。

記者: 分かりました。他にコンディショニングルームとして特別この大会サポートに要望はありますか？

選手: もっとみんな使ったらいいですね。筋緊張の強い方とか、もちろん知的がい害の方でもリラックスを兼ねてっていうのが、やっぱり記録が伸びるっていうことだと思うので。コンディショニングルームの周知の仕方というのか、やっぱり試合が始まる前にいてくださってたらっていうのは正直ありますね。10時に開会式でそれまでにどこでやってるんだらうみたいなのところからまず始まるんで。

記者: この辺りは来年の参考にさせていただきます。本日は貴重なお時間ありがとうございました。

選手: はい。ありがとうございました。

まあ、よんでみて！

第16回 大阪府障がい者スポーツ大会

陸上競技（万博公園記念運動場）

平成28年5月15日、陸上競技部門が万博公園記念運動場にて開催されました。当日は天候にも恵まれ、13種の競技にのべ600名の方が参加されました。

府士会員によるメディカルサポートでは、肢体不自由、知的障がい、視覚障がいを問わず競技前のウォーミングアップから競技後の

クールダウンを行なうため、多くの方にコンディショニングルームを利用して頂きました。また、複数の競技にエントリーしている選手も多く、競技の間にコンディショニングを希望される選手もおられました。

今回初めて参加させて頂き、参加される選手の年齢層や和気藹々とした雰囲気に参加されている方から国体を目指して日ごろからトレーニングを行なわれている方と競技への取り組み方が幅広いことが印象的でした。また、選手の親御さんやご家族だけではなく、視覚障がいの選手の伴走をされている方との話をさせていただくなど、普段関わりを持つことが少ない方と接する機会を得ることができ、貴重な経験となりました。



陸上競技の風景



コンディショニングルーム(陸上)

水泳・卓球競技（東和薬品RACTABドーム）

水泳・卓球競技は東和薬品RACTABドームで5月21日に行われ、227名の選手が参加されました。そのうち23名の方々にコンディショニングルームをご利用いただきました。

水泳では複数種目にエントリーされている選手が多く、試合前と試合後、試合と試合の合間など、複数回コンディショニングルームを利用される選手もいらっしゃいました。

また選手だけでなく、介助として同伴されているご家族にも、ご利用いただきました。

大阪府理学療法士会は第12回大会からサポートを開始し、今回で5回目です。選手やご家族からは「今年も楽しみにしていた」など、認知されている感じが伝わりました。

試合場面を見学した際、高齢の片麻痺の方が、車いすから卓球台を持って立ち、いきいきとした表情で試合をされている姿がとても印象的でした。

私自身は今回初めて参加させていただきましたが、正直このような大会があることを知りませんでした。

13歳以上の身体障がい者及び知的障がい者の方であれば、お住まいの市役所の障がい福祉課で参加申込みが出来ることを知りました。

今回、いろいろな人との関わりの場として、とても貴重な経験となりました。この経験を普段の活動に活かせるよう、がんばっていききたいと思います。



卓球会場の様子



コンディショニングルーム(卓球・水泳)

フライングディスク競技（ファインプラザ大阪）

5月29日に開催された大阪府障がい者スポーツ大会のフライングディスク競技にメディカルサポートとして参加してきました。当日は午前中が曇りで午後が雨であったため競技のプログラム変更があり選手にとってはハードな一日であったと思います。午後は体育館での競技となったため、我々も近くで試合を見ることができ選手の熱気を身近に感じることができました。天候不良によりコンディショニングルームが体育館の2階アリーナに設営されたため今年は5名の利用と昨年を大きく下回る実績となってしまいました。しかし、去年利用された選手が「ここでやっていたのですね」と探してきて下さったのは非常に嬉しく思うとともに、大阪府理学療法士会の活動が徐々に障害者スポーツの分野に浸透してきていると実感することができました。そして、多くの選手等のニーズに対応できるように知識・技術の研鑽をしていくモチベーションを頂くことができました。今後の課題としては、コンディショニングルームを十分に周知し多くの選手に利用して頂けるように広報していく必要があると考えます。

アンプティサッカー活動報告

平成28年5月14日、15日の2日間、第3回レオピン杯Copa Amputeeというアンプティサッカーの全国大会が「花博記念公園」鶴見緑地球技場で行われました。アンプティサッカーとは切断者によるサッカー競技で、今大会では、初の女性選手の参加や小学生の選手が新たに増える等の盛り上がりを見せました。

フィジオサポートでは、第1回から3年連続のサポートとなりました。2日間で100名近くの選手に利用していただきました。下腿や頭頸部に筋の張りや疲労感を訴える選手が多く、徒手療法を中心に、テーピング、物理療法なども併用しながら行いました。今年は足底にできた水泡や創の処置を依頼されることが数例ありました。また熱中症に対する救急対応について、大会Dr.とともに行う場面もありました。空き時間には物療機器を提供して下さっている伊藤超短波さんの講習が突如始まることもあり楽しく活動しています。

これまでの活動により個々のフィジオスタッフが選手のコンディショニングを実施可能になりましたが、徒手療法や物理療法だけでなく、外傷や熱中症などの応急処置、テーピングの対応も必要となってきており、今後は、救急対応や応急処置に関する教育も積極的に進めていきたいと考えています。



試合風景



コンディショニングルーム

まあ、よんでみて！

OSAKA OPEN 大阪国際車いすテニストーナメント

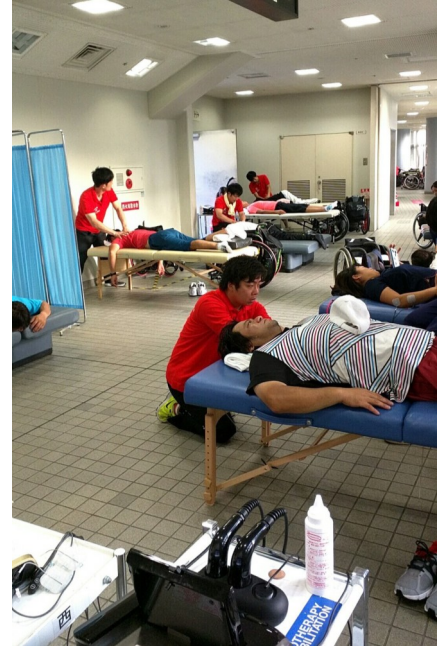


集合写真

9月22日～9月25日の4日間、大阪市にある韃テニスセンターにて「2016 OSAKA OPEN 第16回 大阪国際車いすトーナメント」が開催されました。

大阪府理学療法士会では昨年引き続きボランティアスタッフとサポートを実施しました。事前勉強会として車いすテニスを専門とされている講師の先生をお招きし、実際の現場での対応など実技を交え教えていただきました。

大会当日はリオで行われたパラリンピックの影響もあり、選手だけでなくボランティアスタッフもたくさん参加されていました。治療内容は試合前のコンディショニング、試合後の疲労回復の需要が高く、続いてアイシング、超音波などの物理療法による急性期処置が多かったです。サポート後は「毎年利用してるよ」「来年も先生よろしく」などといった感謝の言葉をたくさんいただき、より一層スキルアップに努めていかなければいけないと感じました。近年、選手や大会側に理学療法士への認識が深まっており需要もたくさんあることから今後活躍の場が広がっていくのではないかと考えました。



コンディショニングルーム

第71回 国民体育大会 希望郷 いわて国体 帯同レポート



競技会場にて

平成28年9月30日より10月7日まで当協会障害者保健福祉部部員の山川雅史が大阪府サッカー協会スポーツ医学委員会より第71回国民体育大会(いわて国体)のサッカー競技少年の部大阪府代表のトレーナーとして帯同を行いました。体調管理から水分、栄養の調整やテーピング、試合での医療処置、宿舎での選手達のケアなど多彩な仕事を行いました。チームは決勝で惜しくも敗れ準優勝となりましたが、トレーナー活動にて一人も離脱者が出ることなく活動ができました。

理学療法士に望むもの

松本 貯子 氏（全国パーキンソン病友の会 大阪府支部支部長）

当会は「一般社団法人全国パーキンソン病友の会」の支部組織として1977年に発足し、現在約600人の会員がおります。

パーキンソン病の原因究明、治療法の確立、医療費の公費負担等を求めてできた患者・家族・遺族による自助組織です。また、社会的な活動だけではなく、趣味活動や情報交換、交流会など患者が病気に立ち向かうための精神的支えとなっています。

パーキンソン病は10年で寝たきりになると言われた進行性難病ですが、近年、進行を遅らせ、症状をコントロールするための治療法がいろいろ開発され、平均寿命も一般と変わらなくなっていると言われております。しかし、4大運動症状といわれる主な症状は勿論、これまで自律神経症状や気分障害と思われてきた不快な症状についても、非運動症状として認識されるようになりました。

進行期にはいると前屈、腰曲り、首下がりが、ジスキネジアやジストニア、脊椎・腰椎の圧迫骨折や足の指の変形、呼吸困難、痛みなど多くの症状に悩まされます。その多くは病気そのものではなく、薬の効果の低下や副作用によって症状が進行したための二次的障害によるものと思われまます。そして、二次的な障害は大きな生活の質の低下を招きます。

しかし、初期の患者でも姿勢異常や足を引きずるなどは珍しくなく、こわばりと筋肉バランスの崩れによって動作時の疲労感が増すのではないかと、正しく立つことができなくなって、痛みや小刻み歩行、突進が始まるのではないかと体感として思います。

初期からパーキンソン病患者特有の症状に合わせた筋肉の働かせ方をすることが、身体を機能面で支えて症状の進行を抑えるのではないかと、思います。身体が変形する前に何とかできないものかと思いたすが、軽度のパーキンソン病患者は主治医でもリハビリテーションへの同意書は貰いにくく、ある程度歪んでくるまで待たなければなりません。

多くの医師はパーキンソン病の治療は服薬で治すものと考え、多くの理学療法士さんは、パーキンソン病の治療は傾いた姿勢の矯正や、姿勢を維持する筋力の向上を目指し、初期のパーキンソン病患者や重度の患者は対象外とされていないでしょうか？

最初に申し上げたとおり、パーキンソン病患者の姿勢異常は診断を受けた時から始まっており、筋肉が正しく働かないために身体が本来自然に行う動きができなくなってきました。

リハビリと言えば理学療法士さんを思い浮かべるほど、理学療法士さんは身近な存在でありながら個々の理学療法士さんの顔が見えません。実際に治療を受けてみると、先生それぞれが持っておられるノウハウが全く違うことにも気付かされます。

筋緊張や姿勢保持、歩行の難しさ、突進、すくみ足へのリハビリも、一般高齢者とは違った課題があることは明らかですが、デイサービスなどにおいては、自転車こぎに代表される筋トレで良いのかどうか。また、日内変動の多いパーキンソン病患者が、ON、OFFのどちらで訓練を受けたら良いかよく質問されますが統一した見解がありますか？

まあ、よんでみて！

理学療法士さんには、もっとパーキンソン病と、患者の生活を知っていただき、そこから見える現在の医療制度がパーキンソン病患者の実態に合っているかどうか検証して頂きたいと思います。

医師、看護師、理学療法士、作業療法士、MSW、これらの専門職に上下はないと思います。医療制度の中で専門性を発揮して、いつでも相談できる、パーキンソン病をよく理解した先生がたくさん増えて下さることを期待します。

喜多田 誠子 氏

(NPO法人 自立生活センター・いこらー)

私たちは、障がい者が中心となって、障がい者の自立と社会参加を広めていく活動をしています。仲間が集い、ありのままの自分を好きになり元気になれる場所です。

障がいのあるなしにかかわらず、誰もがかけがえのない存在であることを伝えていきます。

この泉州地域で一人でも多くの障がい者がいきいきと自分らしい自立生活を実現していけるよう自立生活センター・いこらーの活動を進めていきたいと考えています。



10月15日に行われた登山企画の山頂にて

編集委員：井上拓弥、植田良、亀山千尋、木村公英、朽木友佳子、河野竜也、小恣武陸、高森宣行、
西之原隆宏、西脇由佳、藤野文崇、前田薫、増田勇樹、水野嘉明、山川雅史

(50音順)